

新潟大学医歯学総合病院 診療科(部)情報

新潟大学医歯学総合病院 研修可能診療科一覧

診療科等	内科必修 (24週)	外科必修 (4週)	救急部門 必修*1 (12週)	精神科必修 (4週)	産婦人科必修 (4週)	小児科必修 (4週)	選択研修
循環器内科	○						○
血液・内分泌・代謝内科	○						○
腎・膠原病内科	○						○
呼吸器・感染症内科	○						○
消化器内科	○						○
脳神経内科	○						○
腫瘍内科	○						○
精神科				○			○
小児科						○	○
消化器外科、乳腺・内分泌外科		○					○
心臓血管外科、呼吸器外科		○					○
整形外科		○					○
形成外科							○
小児外科		○					○
脳神経外科		○					○
皮膚科							○
泌尿器科		○					○
眼科							○
耳鼻咽喉科・頭頸部外科		○					○
産科婦人科					○		○
放射線科							○
麻酔科			○				○
高次救命災害治療センター			○				○
リハビリテーション科							○
病理部							○
血液浄化療法部	○						○
医科総合診療科							○
臨床研究推進センター							○

※各診療科の受入期間、同時受入可能数を含む研修内容の詳細については、各診療科情報の内容を必ずご確認ください。

※上記の科目に適用となる診療科は本院での研修のみです。

協力型病院では研修可能診療科は異なりますので、各病院より提示されている情報を参照してください。

※上記の科目は全て選択研修として選択できます。

*1：本院での救急部門研修（必修）は、高次救命災害治療センターでの研修期間を8週、麻酔科での研修期間を4週とします。

循環器内科

診 療 科 目：循環器内科	
診療科担当研修責任者名：猪又 孝元（循環器内科診療科長） 診療科連絡先担当者名：高山 亜美（循環器内科総括医長）	
受入期間：1ヶ月以上（相談可）	同時受け入れ可能数：5人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
総合内科専門医11人、循環器専門医14人、心血管インターベンション学会専門医1人、不整脈専門医3人、日本超音波学会専門医1人、臨床検査専門医1人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本内科学会指導医13人、日本循環器学会指導医8人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
新潟大学循環器内科学教室は、明治43年に設立された旧第一内科を母体とし、平成24年の内科再編により設立された伝統のある教室です。近年増加の一途をたどる心血管疾患に対して、高度な専門医療および地域を支える医療、その基礎となる研究および教育に取り組んでいます。心血管カテーテル治療、心不全、不整脈の3グループが、それぞれ専門性の高い治療を提供し、年間250件以上の冠動脈カテーテル治療、100件以上の血管内治療および構造的な疾患に対するカテーテル治療、200件以上の不整脈カテーテル心筋焼灼術の他、経カテーテル的な大動脈弁置換術（TAVI）や僧帽弁接合不全収縮術（MitralClip）、特異的治療のある二次性心筋症例、肺高血圧症例や心移植および補助人工心臓の検討が必要な症例などへの集学的治療、左心耳閉鎖デバイス（WATCHMAN）、リード抜去術などの先進的治療へも取り組んでいます。埋め込み型心臓デバイスの埋め込み数でも全国有数です。多部署、多職種と連携し循環器救急～心臓リハビリテーションを軸とした「支える医療」にも取り組んでいます。各人の興味や事情に合わせ、幅広い研修を用意しております。	①前期研修では、内科医としての全身診療技量を身につけることを最重要に考えます。循環器疾患については診断から治療、緊急対応、そしてその土台となる基礎的背景までの専門的な研修を行い、生涯の医師としての診療と研鑽に役立つ研修を行っています。 ②病棟では指導医と若手循環器内科医によるチーム主治医制とし、研修医はその一員として主体的に診療に関わり、循環器疾患一例一例に対してきめ細かな指導を受けることで、質の高い研修が可能です。 ③循環器疾患における検査手技について： 救急診療において必須である12誘導心電図および心エコー図でのスクリーニング検査など習得が可能であり、臨床医としての基本的な質を高めることができます。心臓カテーテル検査・冠動脈形成術、電気生理検査・カテーテル心筋焼灼術、ペースメーカー・植込み型除細動器の植込みおよび管理なども経験することが可能です。 ④急性心筋梗塞、急性心不全、発作性不整脈など救急処置を必要とする循環器疾患への対応も重要な研修項目であり、救急部との連携のもとに研修でき、また集中治療室での全身管理の基礎を学ぶこともできます。 ⑤近年高齢化により増加の一途をたどる、慢性心不全患者に対するリハビリを含めた包括的医療など、一般内科へも通ずる総合的な管理も実践できます。 ⑥検討会を通してプレゼンテーション能力を養うとともに、臨床研究の立案など探求的思考の習得も目指して、教育を行っています。

血液・内分泌・代謝内科

診 療 科 目：血液・内分泌・代謝内科	
診療科担当研修責任者名：曽根 博仁（血液・内分泌・代謝内科診療科長） 診療科連絡先担当者名：藤原 和哉（血液・内分泌・代謝内科エデュケーションルマネージャー） 山田 貴穂（血液・内分泌・代謝内科 副総括医長） 片桐 隆幸（血液・内分泌・代謝内科エデュケーションルメンター）	
受入期間：1ヶ月以上（ただし、1年目研修医は2ヶ月以上）	同時受け入れ可能数：8人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
総合内科専門医28人、血液専門医17人、糖尿病専門医24人、内分泌代謝専門医7人、がん薬物療法専門医2人、輸血・細胞治療学会認定医5人、がん治療認定医9人、日本造血細胞移植学会認定医4人、動脈硬化化学会専門医2人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
内科学会指導医18人、糖尿病学会指導医5人、内分泌学会指導医4人、血液指導医13人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
全国的に内科の臓器別細分化が進む中、血液・内分泌・代謝分野を含む当科は、急性から慢性、重症から軽症、若年から老年、腫瘍から動脈硬化・生活習慣病までを幅広くカバーできる「総合内科」的アプローチを重視している。そして大学病院と市中病院の良い点を組み合わせたフレキシブルな研修プログラムにより、最新の知見・技術と豊富で多彩な症例経験を兼ね備えた国際的に通用する専門医を輩出してきた。血液学は臨床腫瘍学の最先端として進歩し続けている分野であり、内分泌・代謝学は患者が最も多く、健康寿命延伸実現の先頭を走る分野で、共に極めて国民的ニードが高く、一生をかけるに値する分野である。 古い大学医局のイメージとはかけ離れた温かい教育的雰囲気は、患者さんに寄り添う人間性豊かな専門医養成のために、当科が最も大事にしている特長の一つで、学生・研修医教育には定評がある。 研究についても、教科書やガイドラインを書き換えるような臨床研究から、難治疾患の新治療法に直結する基礎研究まで、いずれも国際レベルで幅広く展開されており、各人の興味と希望によりいつでも経験可能である。	前期研修では、内科専門医をターゲットに当科両分野に関する研修も行う。両分野とも、一臓器でなく環境・心理も含めて全人的に診る能力が要求されるため、内科医としての基礎を身につけるのに最適な分野であり、一例ずつ丁寧な指導を受けながら余裕を持った「考える内科」の研修ができる。選択科目研修では希望により、両分野同時あるいは各分野に絞った研修もいずれも可能である。意欲的な研修医には学会発表も推奨し、さらに高度な内科的思考を身につける指導も行っている。 後期研修プログラムは、希望の将来像（開業、市中病院勤務、大学教員など）あるいは様々な個人的事情（出産・育児、介護、留学など）に応じ個人別かつ柔軟に組まれるのが当科の特長である。血液班または内分泌・代謝班のいずれかに属してそれぞれの専門医を目指すことも、両分野の専門医を同時に取得して（ダブルボード）、現場医療の最前線で多面的に活躍することも可能である。 血液学については、最新技術を駆使した臨床腫瘍学と移植医療が、内分泌・代謝学については、内分泌疾患全般に加え、糖尿病、脂質異常症や肥満、高血圧も含めた生活習慣病全般の予防治療がそれぞれ習得できる。

腎・膠原病内科

診 療 科 目：一般内科、腎臓、糖尿病、リウマチ・膠原病	
診療科担当研修責任者名：成田 一衛（腎・膠原病内科診療科長） 診療科連絡先担当者名：後藤 眞（腎・膠原病内科エデュケーションマネージャー） 忒田 亮平（腎・膠原病内科総括医長）	
受入期間：１ヶ月以上（原則）	同時受け入れ可能数：６人
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
総合内科専門医19人、腎臓専門医14人、透析専門医８人、糖尿病専門医２人、リウマチ専門医７人、老年医学専門医１人、高血圧専門医１人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
内科学会指導医19人、腎臓学会指導医10人、透析学会指導医５人、糖尿病指導医１人、リウマチ指導医４人、老年医学指導医１人、高血圧指導医１人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
新潟大学の前身、新潟医科大学創設からの伝統を受け継ぐ内科学講座である。高度医療技術を用いて専門領域の診療を担当するとともに、内科全体を広い視野で把握しその上で専門性を発揮してゆくという機運に満ちている。担当診療科目の臨床／教育／研究の３分野を担当、なかでも臨床を最優先と捉えており、優れた臨床医を目指すことが当科のモットーである。腎臓病学領域では、日本で初めて腎生検と透析療法を実施した歴史を持つ。腎生検組織は日本でトップクラスのリソースを有し、腎組織病理から腎移植までの全般にわたる診療を行う。リウマチ膠原病疾患については、新潟県内の中心施設としての役割を果たしている。	当科での前記研修目標は、１）病棟医として患者を診察し、病態を正確に把握すること、２）患者の状態を正確に上級医に伝え、鑑別診断を挙げ検査方法を決定し、可能なものは自分で実施すること、３）診断確定後の治療方針を自分自身で決定し、上級医の指導の下で実施することである。当科では腎臓内科と膠原病内科を担当する診療チームによる医療を展開している。チームは後期研修医、大学院生、専門医など５－７人から成り、チーム内ミーティングを頻繁に行い、意思疎通を図っている。 当科では、全身にわたる症候から急性期、慢性期疾患を扱い、内科の中でも全身管理を要求される。医師としては必ず遭遇するcommon disease から内科専門医資格として経験が要求される希少疾患まで幅の広い診療を経験し、各疾患毎の症例検討会に参加することで、内科全般にわたる鑑別診断やプレゼンテーション能力を養うことが可能である。毎週の教授回診では当科のみならず、他科併診の患者を検討し、臓器連関や全身管理の方法を学ぶ。選択科目研修では、将来、腎臓・糖尿病・リウマチ膠原病などの専門医を希望する場合は、より早期に専門医を取得するための準備期間になり、他科を専攻することを決めている場合でも内科診療の基本や体液管理・輸液療法の習得など一定期間の内科研修を行う場としても有用である。

呼吸器・感染症内科

診 療 科 目：一般内科、呼吸器、腫瘍、アレルギー、膠原病、感染症、心身症	
診療科担当研修責任者名：菊地 利明（呼吸器・感染症内科診療科長） 診療科連絡先担当者名：青木 信将（呼吸器・感染症内科エデュケーションマネージャー）	
受入期間：１ヶ月以上（原則）	同時受け入れ可能数：６人
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
内科学会専門医26人、呼吸器学会専門医19人、アレルギー学会専門医３人、感染症学会専門医７人、気管支鏡専門医７人、心身医学会専門医２人、がん治療認定医６人、がん薬物療法専門医２人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
内科指導医20人、呼吸器学会指導医９人、アレルギー学会指導医２人、感染症学会指導医４人、気管支鏡指導医２人、心身医学会指導医２人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
新潟大学の前身、新潟医科大学創設からの伝統を受け継ぐ内科学講座である。高度医療技術を用いて専門領域の診療を担当するとともに、内科全体を広い視野で把握しその上で専門性を発揮してゆくという機運に満ちている。臨床能力の優れた医師の育成はもちろん、臨床的疑問を研究者としての視点でもとらえ、基礎研究や臨床研究の手法で解決できるphysician scientistの育成も行っている。	当科での前記研修目標は、１）病棟医として患者を診察し、病態を正確に把握すること、２）患者の状態を正確に上級医に伝え、鑑別診断を挙げ検査方法を決定し、可能なものは自分で実施すること、３）診断確定後の治療方針を自分自身で決定し、上級医の指導の基で実施することである。当科では２つの診療チームがあり、いずれかのチームに所属することを原則としている。呼吸器、感染症の様々な疾患に対応できるよう約10名から成るチームでミーティングを頻繁に行い、意思疎通を図っている。 どこの科に進んでも必ず遭遇するcommon disease から内科専門医資格として経験が要求される間質性肺炎などの希少疾患や、感染性疾患、肺腫瘍、呼吸不全まで幅の広い診療にあたってもらう。専門分野の症例検討会に参加することで、特殊疾患の診かたやプレゼンテーション能力を養うことができる。週１回の教授回診では当科入院の患者のみならず、他科との兼科（併診）の患者の回診を行う。 選択科目研修では、将来、呼吸器・感染症専門医を希望する場合は、より早期に専門医を取得するための準備期間になるであろう。また、他科を専攻することを決めている場合でも画像の読みを学習するなど一定期間の内科研修を行う場としても有用である。

消化器内科

診 療 科 目：消化器内科	
診療科担当研修責任者名： 土屋 淳紀（消化器内科准教授） 診療科連絡先担当者名： 林 和直（消化器内科エデュケーションアルマネージャー）	
受入期間：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数：５人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
内科学会認定内科医21人、総合内科専門医 9 人、消化器病学会専門医19人、消化器内視鏡学会専門医18人、肝臓学会専門医19人、がん治療認定医 7 人、肥満症専門医 1 人、再生医療認定医 5 人、カプセル内視鏡認定医 2 人、膵臓学会指導医 2 人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
内科学会指導医15人、消化器病学会指導医10人、肝臓学会指導医 6 人、内視鏡学会指導医 9 人、がん治療指導医 1 人、肥満症指導医 1 人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
当診療科は昭和42年に開設され、平成29年には開設50周年を迎えました。市田文弘初代教授のもと、我が国における肝臓病学の先駆的な臨床研究を行い、多くの優れた人材を輩出しました。現在は第4代寺井崇二教授が教室を牽引しています。消化器内科は上部・下部消化管、肝胆膵など広い領域の多くの疾患を扱います。全ての分野の基本的な知識・技術を備えた“総合消化器内科医”の育成をめざし、教育体制を整備しています。一方で将来“かかりつけ医”を目指している先生や総合診療医を目指している先生に対しては、内視鏡やエコーなどの手技を習得することで、より多くの患者さんの病態に関与できます。消化器がん、炎症性腸疾患、肝硬変など疾患だけでなく、今後は「機能性ディスペプシア」、「MASLD」も増加すると予想されています。高度な知識と技術を身につけた消化器内科医の育成は社会的な急務です。AI内視鏡の進歩や働き方改革の取り組みを進め、患者さんの「なおりたい」という思いを受けとめ、一人でも多くの患者さんを「治したい」と考えています。	研修期間中は、主要な肝臓、胆膵、消化管の病気を均等に担当できるように心掛けています。各領域は専門の5～6人の医師で構成される主治医グループの一員となり、上級医の直接指導のもとで実践的な研修を行います。当科はアットホームな雰囲気であり、どの上級医や指導医に相談しても、熱心に指導してもらえます。関連病院から紹介される診断治療の困難症例に対しては、チームで相談し、検討会で議論を重ねて一例一例大切にする姿勢が大学病院での研修の特徴です。同時に、急性腹症例などの救急搬送や緊急入院症例も多くあり、迅速な判断を要する救急医療の実際を学ぶことも十分可能です。また、消化器疾患診療における基本的な検査手技（上部消化管内視鏡検査や腹部超音波検査など）の実技研修を受けることができます。さらに、高度な診断治療手技である腹部超音波下の穿刺治療、血管造影、各種内視鏡治療などについては、診断や治療方針を決定する各種検討会に参加し、その基本を学び、指導医に対してその介助ができることを到達目標としています。充実感のある研修の日々を共に経験しましょう。

脳神経内科

診 療 科 目：脳神経内科	
診療科担当研修責任者名： 小野寺 理（脳神経内科診療科長） 診療科連絡先担当者名： 石黒 敬信（脳神経内科エデュケーションアルマネージャー） 林 秀樹（脳神経内科メンター）	
受入期間：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数：８人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
日本神経学会専門医20人、内科学会専門医14人、日本認知症学会 5 人、脳卒中学会専門医 2 人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本神経学会指導医10人、内科学会指導医13人、日本認知症学会指導医 5 人、脳卒中学会指導医 2 人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
脳神経内科は脳と神経に関する病気を扱う内科です。扱う症候はとても多彩であり、内科の中でも総合診療的な色合いの大きい科と言えます。全ての診療科の訴えの患者さんが当科の新患には混ざってきますので、当科を研修することで、内科一般の初期診断の総合的な力がつくと思われています。さらに、苦手な人の多い脳脊髄の画像診断を数多く経験できます。日本でも珍しい、脳神経系に特化した病理カンファレンスを毎月開催しています。また、脳研究所の基礎系の教室との共同研究で、先端の成果を日常の診療に応用する事も行っています。厚生労働省の主管する難病研究班の班長を務め、これらの疾患の全国的な中心地であると共に、医師主導治験など、新しい治療法の開発も行っています。日々の診療から、未来の診療まで携わることができる診療科です。	高齢化社会が進み、加齢性の脳神経系の病気には必ず遭遇します。頭痛、しびれ、認知症や、歩行障害、パーキンソン病など、よく見る脳神経系の病気の一般的な診察の仕方、専門医に紹介するポイントなど、初期レジデントの視点に立った指導を行います。屋根瓦式のグループ主治医制をとっており、いつでも相談でき、オンオフを切り切り替えて研修することが可能です。 また、失神、痙攣、意識障害などの、救急疾患への対応も学ぶ事ができます。急性期から慢性期まで、脳神経系の問題に関する苦手意識を払拭する研修を目指しています。脳神経領域が得意な人も、苦手な人も是非、初期研修の内に、しっかりと、学んでください。

腫瘍内科

診療科目：腫瘍内科	
診療科担当研修責任者名：西條 康夫（腫瘍内科診療科長） 診療科連絡先担当者名：周 啓亮（腫瘍内科副診療科長・エデュケーショナルマネージャー）	
受入期間：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数：２人
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医４人、日本内科学会総合内科専門医２人、日本内科学会内科専門医２人、日本呼吸器学会呼吸器専門医１人、日本血液学会血液専門医１人、日本臨床検査医学会臨床検査専門医１人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本臨床腫瘍学会がん薬物療法指導医２人、日本内科学会内科指導医２人、日本呼吸器学会呼吸器指導医１人、日本血液学会血液指導医１人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
当診療科は2012年11月に誕生した新しい診療科です。従来、臓器別診療の中で行われてきた「がん薬物療法」を臓器横断的に行います。進歩の著しい分子標的治療薬も取り入れ、様々ながんに対する薬物療法を実践する腫瘍内科の研修を行っています。	本プログラムは内科学、特に腫瘍内科学の研修を希望する医師を対象としたものです。研修内容は、主な悪性腫瘍である消化器がん、乳腺がん、希少がん等について、基本的な知識や診察、検査所見の考え方などを習得し、がん薬物療法の基礎を理解することを目的としています。また、悪性腫瘍患者および家族の心理や背景を把握し、緩和治療の基本を習得することも目的としています。腫瘍内科研修を通じて、悪性腫瘍患者の全人的な診療が可能となるよう養成します。

精神科

診療科目：一般精神科、心療科、児童精神科、リエゾン精神科、老年精神科	
診療科担当研修責任者名：未定（精神科診療科長） 診療科連絡先担当者名：未定（精神科エデュケーショナルマネージャー）	
受入期間：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数：５人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
日本精神神経学会専門医18人、日本臨床精神神経薬理学会専門医３人、こどものこころ専門医３人、日本小児精神神経学会認定医２人、日本児童青年精神医学会認定医１人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本精神神経学会指導医14人、日本臨床精神神経薬理学会指導医２人、こどものこころ指導医１人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
最新の国際的診断基準の導入やエビデンスに基づいた診療など、優れた精神科臨床の実践を目指している。最近では、うつ病の増加、児童の心の問題、認知症の増加など、精神医療のニーズが非常に高まっており、当科では、こうした様々な疾患に十分対応できる臨床医の育成に取り組んでいる。診断学と治療学は臨床で、最も大切な技能であり、指導医はこうした技術を十分に習得できるよう努力している。今後爆発的な需要が見込まれる児童思春期精神医学についても、専門医を養成するため、国内の専門機関との人材交流などのプログラムを用意している。活発な臨床活動から生じる様々な疑問を解決しようとする姿勢を重視し、約10領域の臨床研究グループが、新しい知見を国内外に精力的に発表している。	午前中は主に外来、午後からは入院研修を行う。外来研修では、最初に新患者の予診を行い、その後診断学について専門的教育を受けた上級医師と共に診察を行った上で、診断及び治療方針を確定する。当科研修中は毎日これを繰り返すことで、診断学について習熟できる。入院研修ではプライマリケアで扱うことの多いうつ病、不安障害、認知症、意識障害（せん妄）や統合失調症を中心に３症例以上を担当する。研修医は２～３人で構成される主治医グループの一員として診察にあたり、主治医グループ全員参加による週１回のグループ回診、及び毎週火曜日に行われる医師全員参加による検討会に参加する。検討会では、詳細な総括を作成し、新入院患者全員に対して面接を行い、診断及び治療方針について活発な議論を行う。更に入院中の患者全員についても毎週ショートプレゼンテーションを行うため、全医師が全患者の情報を共有し、グループ以外の医師からも多くの助言を得られる。症例検討会では診断に悩む症例や治療困難症例などについて文献的考察を行った上で活発な議論が交わされる。時季が合えば上級医に帯同して全国規模の学会やセミナーに参加することができる。

小児科

診療科目：小児科

診療科担当研修責任者名：齋藤 昭彦（小児科診療科長）
 診療科連絡先担当者名：沼野 藤人（小児科総括医長）
 阿部 忠朗（小児科エデュケーションショナルマネージャー）
 澤野 堅太郎（小児科メンター）

受入期間：4週間以上

同時受け入れ可能数：3人以内

学会認定専門医数

小児科学会専門医31人、腎臓学会専門医2人、リウマチ専門医1人、血液学会専門医3人、小児血液がん専門医3人、造血細胞移植認定医1人、がん治療認定医0人、小児循環器専門医3人、循環器専門医1人、内分泌学会内分泌代謝専門医1人、糖尿病学会専門医2人、臨床遺伝専門医1人、感染症専門医1人、小児神経専門医1人、てんかん専門医1人、周産期新生児専門医5人

学会認定指導医数

小児科学会指導医19人、腎臓指導医2人、リウマチ指導医1人、血液指導医2人、小児血液がん指導医2人、糖尿病指導医1人、感染症指導医1人、小児感染症暫定指導医1人、てんかん指導医1人、周産期新生児指導医3人、臨床研修指導医2人

診療科の概説・特徴

新潟大学病院小児科は、未来を担う子ども達の代弁者（Advocate）としての小児科医、高度な専門性を持つと同時に「全人的医療」ができる小児科医を育成することを目標としています。過去20年で150人以上の若い力が私共の教室に参加し、全国でも有数の小児科医数を育成してきました。小児科の主要領域（腎臓、リウマチ・膠原病、血液・腫瘍・免疫、循環器、感染症、内分泌・代謝、新生児、神経、集中治療）において、国際性、多様性、熱意を持つ各専門指導医を揃えていますので、研修医の皆さんには小児医療における難解な初期診断や治療方針の決定や入院管理の過程で、様々な経験を積んでいただくことが出来ます。救急医療では小児における総合診療の経験も得ることも可能です。また、当教科はSNSでの発信にも力をいれています。ホームページには研修医の先生用のページもご用意していますので、ご興味がある先生はぜひご覧ください。

ホームページは右のQRコードからご覧になれます→



診療科研修の特徴

小児病棟と周産母子センター新生児集中治療部において、8つの専門グループに分かれて小児の主要な領域の診療に当たっています。研修医の先生には各診療チームの一員として診療に当たってもらいます。毎朝、症例検討、小講座など30分間のカンファレンスを行っています。研修医にも積極的に参加していただきます。毎週木曜日には症例検討会、教授回診があり、担当外の診療グループの症例の検討にも参加することができます。この病棟研修を通じて、問診、患児やご家族とのコミュニケーションのとり方、診察法、検査の出し方、そしてその結果の評価法を研修します。外来診療研修では、採血、点滴、注射といった処置や、新患の予診などを行います。当科の外来は処置が多いので、4週間の研修で小児の処置が一通りできるようになります。さらに、研修医の皆さんが小児急性疾患・救急疾患を経験できるように、一般救急研修の充実を図っています。新潟市医師会のご協力により新潟市急患センターで小児一次救急の研修を、そして当科が二次輪番救急当番日に指導医とともに当直をすることによって緊急入院における初期対応の経験を積むことができます。学術的な指導も充実しており、教室員によるリサーチミーティングにも参加していただけます。

消化器外科、乳腺・内分泌外科

診療科目：消化器外科、一般外科、乳腺・内分泌外科

診療科担当研修責任者名：若井 俊文（消化器外科、乳腺・内分泌外科診療科長）
 診療科連絡先担当者名：坂田 純（消化器外科、乳腺・内分泌外科エデュケーションショナルマネージャー）

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：6人以内

学会認定専門医数

外科学会専門医25人、消化器外科学会専門医15人、乳癌学会専門医3人、消化器病学会専門医7人、大腸肛門病学会専門医3人、消化器内視鏡学会専門医1人、肝胆膵外科高度技能専門医5人、日本救急医学会専門医1人、内分泌・甲状腺外科学会専門医1人

学会認定指導医数

外科学会指導医7人、消化器外科学会指導医8人、消化器病学会指導医1人、肝胆膵外科高度技能指導医2人、乳癌学会指導医1人、大腸肛門病指導医2人、胆道学会指導医4人、膵臓学会指導医4人

診療科の概説・特徴

当科は新潟医学専門学校創立当初の外科学教室として開設以来、技術の高い信頼できる外科医を育成・輩出してきました。現在、消化器・一般外科として、主に上部消化管、下部消化管、肝胆膵・移植、乳腺の4つを担当領域の主軸としています。新しい外科技術を駆使できる応用力、チーム医療をリードする協調性と指導力、Academic surgeonを目指す学術的な推進力、こうした要素を持った人材を一人でも多く育成できるよう、診療・指導にあたっています。新潟県内、日本国内のみならず、海外にも適用するマルチタレントな外科医の育成を目標としています。近年は、直腸癌、胃癌、食道癌に対してロボット支援下手術を導入し、症例を積み重ねています。高侵襲手術の多い肝胆膵領域も腹腔鏡下手術を積極的に導入し、ロボット支援下手術も視野に入れて取り組んでいます。手術のみならず、がん遺伝子パネル検査を推進し、化学療法を含めた集学的治療を実施しております。移植医療に関しては、脳死臓移植を年間数例ですが継続して実施しております。乳腺診療についても、乳癌診療のみならず、遺伝性乳癌卵巣癌症候群をはじめとした遺伝性腫瘍の診療においても力を入れ、BRCA変異陽性乳癌患者に対するリスク低減乳房切除術も行っています。

診療科研修の特徴

消化器・一般外科コース、乳腺専門医コースの2つがあります。外科医に要求される基礎的な診療能力（医療技術、問題解決能力、チーム医療）の習得をめざします。

- 1) 多様な外科疾患・手術を経験することにより、最終的には高難度手術・先端的な手術へつながる幅広い外科的技術が身につくよう指導します。外科専門医資格取得に必須である呼吸循環外科、小児外科の研修も可能になっています。消化器外科を志す初期研修医（選択コース）に対して、主要消化器手術および腹腔鏡実習トレーニングを積極的にしてもらっています。
- 2) 専門性に必要な学術的業績の指導も行い、国際的にも活躍できる人材の育成を目指します。また外科医同士の連携・人脈を実感してもらうため学外研修・研究会および学会参加・海外留学を積極的に行っています。将来、視野を広くもち、困難な症例・状況を問題解決していく能力につながります。
- 3) 大学およびハイボリュウム病院での研修を組み合わせた研修が基本です。多くの指導医から手術技能・知識を獲得しながら、専門医資格（卒後6年目）をとるだけでなく、基本的な外科手術そして医療技術にて救命する力をもつ、患者・他科医師から信頼されるAcademic surgeonを目指してください。

心臓血管外科、呼吸器外科

診 療 科 目：心臓血管外科、呼吸器外科	
診療科担当研修責任者名：土田 正則（呼吸器外科診療科長） 診療科連絡先担当者名：白石 修一（心臓血管外科・呼吸器外科エデュケーションマネージャー、心臓血管外科診療科長） 後藤 達哉（心臓血管外科・呼吸器外科メンター）	
受入期間：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数：５人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
外科学会専門医15人、心臓血管外科専門医 8 人、呼吸器外科専門医 4 人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本胸部外科学会指導医 1 人、日本外科学会指導医 4 人、心臓血管外科修練指導医 4 人、日本呼吸器外科学会指導医 2 人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
新潟大学に於ける胸部外科手術は昭和20年代の肺結核手術や閉鎖式心臓手術に始まる。昭和38年に心臓血管外科手術、呼吸器外科手術を担当する現在の形の外科学第二講座が誕生し、以来、新潟県内を中心に最先端で高度の技術、安全な手術を提供し続けてきた。小児心臓外科では新生児複雑心疾患手術の症例数も多く、国立大学病院屈指の手術件数に達している。また、成人心臓血管外科では従来の開心術に加え、ステントグラフト治療も数多く行っている。呼吸器外科においては切除困難症例の手術に積極的に取り組む一方、鏡視下手術などの手術の低侵襲化にも重点を置き、肺葉切除では完全鏡下手術が標準的な手技となっている。	循環器外科と腫瘍外科を中心とした呼吸器外科という異なる面を持つ診療を行っているが、研修期間では研修医が興味を持っている分野で研修することも、双方の研修を行うことも可能である。チーム医療が基本であり、指導医の下に修練医と研修医というチーム構成になる。常に指導医や修練医と診療を行い、外科的な考え方や手技を重点に研修をする。但し、研修医であっても個々の能力によっては、指導医の指導のもとに術者として手術を行う機会を与える。将来、外科専門医取得を目指す研修医にとっては、当科での研修期間で、当科の分野の手術の必要症例数を経験することが可能である。心臓血管外科は循環器内科、小児心臓内科、放射線診断科との検討会、呼吸器外科は放射線診断科・治療科、呼吸器内科、病理部との検討会を定期的に開いており、それぞれの分野の知識を深めることができる。

整形外科

診 療 科 目：整形外科全般、四肢脊椎外傷、股関節外科、膝関節・スポーツ医学、骨軟部腫瘍外科、関節リウマチ、脊椎・脊髄外科、手の外科、骨粗鬆症	
診療科担当研修責任者名：川島 寛之（整形外科診療科長） 診療科連絡先担当者名：望月 友晴（整形外科総括医長）	
受入期間：１ヶ月以上（２ヶ月以上を基本とする）	同時受け入れ可能数：５人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
日本整形外科学会専門医23人、日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医 5 人、日本スポーツ協会認定スポーツドクター 5 人、日本リウマチ学会専門医 3 人、日本手外科学会専門医 2 人、日本骨粗鬆症学会認定医 3 人、再生医療認定医 2 人、日本リハビリテーション医学会臨床認定医 1 人、日本整形外科学会認定骨・軟部腫瘍医 2 人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本整形外科学会指導医14人、日本脊椎脊髄病学会 脊椎脊髄外科指導医 4 人、日本リウマチ学会指導医 2 人、日本手外科学会指導医 1 人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
新潟大学整形外科講座は大正 6 年（1917年）本邦で 4 番目に開講し、100年目を迎える国内有数の伝統教室です。伝統を大事にしながら最新の治療も導入し、整形外科のすべての分野において高いレベルの治療を行っています。地域の中核施設として数多くの治療困難例の治療を担当しておりますが、外傷など多彩な疾患の治療も行っております。	整形外科における基本的な診断、治療の實際を学んでいただくことを第一の目標とします。そのために整形外科のいくつかの分野にわたってバランス良く研修をしていただくことになります。診療はグループごとに行っておりますので、このグループの一員として診療にあたっていただきます。外傷例が搬入された際には、外傷治療のチームの一員として救急処置、手術の研修も可能です。期間中に可能な限り術者としての経験もしていただいております。術前、術後検討会への出席、各診療班ごとの検討会への出席、抄読会、X線画像検討会、その他レジデント向けの講義などを行っており、短期間であっても整形外科に関する基礎的な知識や処置を研修していただけることを目標としております。希望に応じてリハビリテーションの研修も可能です。

形成外科

診 療 科 目： 一般形成外科、再建外科、頭蓋顎顔面外科、手外科	
診療科担当研修責任者名： 松田 健（形成外科診療科長） 診療科連絡先担当者名： 菅束 洋平（形成外科総括医長） 若槻 華子（形成外科エデュケーションショナルマネージャー）	
受入期間： １ヶ月以上	同時受け入れ可能数： ２人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
形成外科専門医６人、日本創傷外科学会専門医１人、日本頭蓋顎顔面外科学会専門医３人、日本熱傷学会専門医２人、がん治療認定医２人、手外科専門医１人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
形成外科指導医４人、手外科指導医１人、日本形成外科学会皮膚腫瘍外科分野指導医３人、日本形成外科学会再建・マイクロサージャリー分野指導医２人、日本形成外科学会小児形成外科分野指導医２人、レーザー分野指導医２人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
形成外科はあらゆる手技（植皮術・皮弁移植術、マイクロサージャリー、口唇・口蓋裂の形成術など）を駆使し、先天的・後天的な身体の醜状変形に対し、機能・形態を正常にすることで、患者の社会適応を目指す外科学です。最良の形態・機能を再建することは患者のQOLを大幅に改善し、時に人生を変えるほどの影響をもたらします。形成外科単独の診療はもちろん、耳鼻咽喉科、外科、整形外科、救命救急科、脳神経外科、眼科、口腔外科、泌尿器科、皮膚科など、多くの診療科と共同診療・再建手術を行うことで新潟大学医学総合病院としてのより高いレベルの治療提供に貢献しています。また、先進医療にも積極的に取り組み、常に世界の最先端を視野に入れた知識と技術習得への挑戦を怠らず精力的に診療に取り組んでいます。	比較的小さい局麻手術から大がかりな再建手術、先天異常や難治性潰瘍、外傷など、当院では形成外科の診療領域のほぼすべてをまんべんなく経験することができます。多様な症例を通して様々な「きず」をどのように診て、扱い、きれいに修復するのかを学んでもらいたいと考えています。当科では基本的には研修医も主治医チームの一員として診療に当たる体制としており、手術目的、その具体的内容、術直後の指示、退院までの治療計画等につき直接学ぶことが可能です。担当症例の手術には助手として参加し、上級主治医から局所解剖や手術の要点についての詳しい解説を受け、これらを通して形成外科の基本である皮膚縫合、皮膚移植術などの指導も同時に受けます。また、当科では顕微鏡下でのマイクロサージャリーの体験、訓練を行うことのできる設備も整っており、上級医から血管の吻合法・神経の縫合法の技術指導を受けることが可能です。外来においては、予診のとり方、写真撮影法などを習得し、上級医師の診察について、所見のとり方、治療計画のたてかたの指導を受け、担当症例の短期成績あるいは、類似症例の長期結果を学ぶことになります。

小児外科

診 療 科 目： 小児外科	
診療科担当研修責任者名： 木下 義晶（小児外科診療科長） 診療科連絡先担当者名： 小林 隆（小児外科エデュケーションショナルマネージャー）	
受入期間： １ヶ月以上	同時受け入れ可能数： ２人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
日本小児外科学会専門医４人、日本外科学会専門医５人、日本小児泌尿器科学会認定医１人、日本小児血液・がん学会小児がん認定外科医１人、日本周産期・新生児医学会認定外科医１人、日本がん治療認定医２人、日本移植学会移植認定医１人、日本消化器外科学会専門医１人、日本肝臓学会専門医１人、日本再生医療学会認定医１人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本小児外科学会指導医１人、日本外科学会指導医２人、日本消化器外科学会指導医１人、日本膵臓学会指導医１人、日本肝胆膵外科学会高度技能指導医１人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
当科の歴史は、新潟大学外科教室の中に小児外科研究班が生まれた昭和45年に遡ります。その後昭和56年に診療科が付属病院に開設され、それから10年間の診療実績が評価され平成3年に小児外科学講座として独立し現在に至っています。国公立大医学部で小児外科単独で講座を有するのは10大学しかなく、その1つとして当科は本邦の小児外科の臨床・研究に大きな業績を上げてきました。 過去40年以上にわたる豊富なデータを有し、過去の実績に基づいた確かな診療を行う一方で、内視鏡手術など最先端の手術手技を導入し更なる発展を見せています。また他科の小児診療チームとの連携も確立しており、総合的な小児医療を学ぶことができます。 小児固形悪性腫瘍の治療では、Niigata Tumor Boardを40年前からたちあげ、新潟県全体で統一した治療を行い、良好な成績をおさめています。また周産期医療、先天性泌尿生殖器疾患においても多診療科での検討会を定期的に行い、治療レベルの向上に努めています。	小児外科は、原則として一般小児外科研修を基本とし、その他新生児診療・小児救急疾患への対応等を広く研修できるシステムになっています。短期間の研修であっても、小児外科だけでなく外科の周術期管理の考え方、検査の目的と異常所見の意義について理解することができます。また、毎日、指導教官、研修医で行う朝カンファレンスに参加することで各症例の病状プレゼンテーション能力をトレーニングすることができ、かつ腹部、胸部X線写真、CT、MRI、各種造影検査、シンチグラフィー等の臨床医として必須の画像検査を全員でディスカッションすることで、画像診断能力も高めることができます。手技的な実地研修においては、比較的容易な手術の執刀、小児外科手技の修得の他、日常診療の中で乳幼児の採血、静脈ルート確保等、将来の専門分野に関わらず、臨床医としての必要技能をスキルアップできると思います。

脳神経外科

診療科目：脳神経外科	
診療科担当研修責任者名：大石 誠（脳神経外科診療副科長） 診療科連絡先担当者名：大石 誠（脳神経外科エデュケーション・マネージャー） 鈴木 倫明（総括医長）	
受入期間：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数：４人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
脳神経外科学会専門医13人、脳卒中学会専門医３人、てんかん学会専門医２人、神経内視鏡学会技術認定医８人、日本がん治療認定医４人、脳神経血管内治療学会専門医６人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
脳神経外科学会指導医９人、脳神経血管内治療学会指導医２人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
昭和28年（1953年）に、日本で最初に脳神経学科学専門の講座として開講した教室です。したがって、県内外に救急救命治療や多数の脳外科手術をこなす多くの基幹病院を関連病院として有しており、その中で鍛え上げられた優れた教室員達が日々の診療にあたっております。また、日本脳神経学科黎明期から受け継がれてきた診療および手術技術をもつ一方、脳神経内科とともに脳研究所という基礎・臨床を一体とした研究組織に所属していることも他にない特色です。	対象疾患として、脳腫瘍、脳血管障害、下垂体疾患、新生児・小児神経疾患、機能的疾患などの高難度手術治療を要する症例に加え、日々救急搬送を受ける頭部外傷や脳卒中の緊急治療にもチームで一丸となって取り組んでいます。研修ではこの臨床チームの一員として治療計画や手術を中心とした治療に携わることとなります。このような経験を通し、神経救急患者に冷静に対応できる実力や、全身管理にまつわる知識、また外科医として必要な技術を身につけることができます。カンファレンスは術前検討会・外来新患症例検討会が週２回（月、水の夕方）、術後報告会が週２回（火、木の朝）、IVR検討会が週１回（水の朝）行われ、臨床に必要な考え方を学びます。その他、新潟市内の関連病院において機能外科（てんかん外科など）や脊髄外科を見学・研修することも可能です。当科は脳研究所内の神経病理や統合脳機能研究センターなどの神経基礎講座との交流もあり、特に神経研究に興味のある諸君は、研修期間中にさらに一歩進んだ経験の機会を得ることも可能となっています。

皮膚科

診療科目：皮膚科一般、膠原病、接触アレルギー、脱毛症、皮膚悪性腫瘍、薬疹、遺伝性皮膚疾患など	
診療科担当研修責任者名：阿部 理一郎（皮膚科診療科長） 診療科連絡先担当者名：林 良太（皮膚科エデュケーション・マネージャー）	
受入期間：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数：３人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
皮膚科専門医12人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
皮膚科学会認定指導医５人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
新潟大学の前身である新潟医科大学時代からの伝統をもち、新潟県の皮膚科診療の中枢を担っている。皮膚疾患全般を診療の対象とし、高次皮膚科診療施設として難治あるいは重症皮膚疾患患者を多数受け入れているほか、多岐にわたるサブスペシャリティを持ち、各種専門外来を設けている。膠原病外来ではエリテマトーデス、強皮症、皮膚筋炎の治療、リンパ腫・薬疹外来では、菌状患肉症をはじめとする皮膚リンパ腫や重症薬疹を含めた薬疹患者の治療、精査を行っている。遺伝性疾患外来ではほぼ全ての遺伝性皮膚疾患の遺伝子解析、治療に対応しているが、特に遺伝性毛髪疾患に力を入れている。腫瘍外来では皮膚腫瘍全般の治療を行い、新潟県内全域の患者を受け入れている。アトピー外来、乾癬外来では治療に加え生活指導も行い、特に生物学的製剤を要する重症患者の多くを当施設で治療している。 当施設では新潟県内の様々な皮膚疾患患者の診療を行っており、皮膚科領域全体をカバーする研修が可能である。	卒後臨床研修では多彩な皮膚疾患の診療を理解するため、原則として午前中は新患外来および外来処置・手術室で研修を行い、希望により各種専門外来での研修や中央手術室での研修も行う。午後は病棟主治医グループの一員として研修を行う。皮膚腫瘍を対象とする専門グループと、他疾患全般を対象とする一般グループから希望により選択でき、複数グループの研修も可能である。さらに症例検討会（週１回）で高度な臨床および皮膚病理組織診断の現場を体験できる。 専門研修では皮膚疾患全般に適切に対応できる診療能力を修得し、全人的医療の実践を目標とする。新潟大学医歯学総合病院とその関連病院で研修し、５年目以降に日本皮膚科学会認定皮膚科専門医を取得した上で、サブスペシャリティに応じた各種指導専門医（現在、皮膚悪性腫瘍指導専門医と美容皮膚科・レーザー指導専門医があり、今後多数導入予定あり）の取得を目指す。専門研修ならびに生涯教育のための充実した学術環境として、伝統ある日本皮膚科学会新潟地方会がある。大学院へ進学し皮膚科関連課題の研究による学位取得も可能であり、取得後の海外留学も盛んである（海外留学の希望は最優先させている）。卒後10年目以降は、大学病院で後輩の指導と研究を行い教員を目指すコースと、関連病院で指導医として研修医や若手皮膚科医の指導にあたるコースがある。

泌尿器科

診療科目 ：泌尿器科	
診療科担当研修責任者名 ：富田 善彦（泌尿器科診療科長） 診療科連絡先担当者名 ：齋藤 和英（泌尿器科准教授） 田崎 正行（泌尿器科エデュケーションマネージャー）	
受入期間 ：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数 ：２人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
泌尿器科専門医19人、日本泌尿器内視鏡学会泌尿器腹腔鏡技術認定医10人、日本内視鏡学会外科学会技術認定医 8 人、日本がん治療認定医 4 人、日本癌治療学会臨床試験登録医 1 人、日本臨床腎移植学会腎移植認定医 3 人、日本移植学会移植認定医 3 人、日本排尿機能学会排尿機能専門医 2 人、日本小児泌尿器科学会認定医 2 人、da Vinci サージカルシステムパイロット（手術医）7 人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本泌尿器学会指導医14人、日本泌尿器学会・日本泌尿器内視鏡学会・泌尿器ロボット支援手術プロクター 3 人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
泌尿器科は外科学の一分野を担っているが、扱う臓器・疾患の範囲は広い。当科における特色をなす分野としては、泌尿器腫瘍学、神経泌尿器科学、腎移植学、泌尿器内視鏡外科学等があげられるが、これらの分野では新潟県内でのリーダー的役割を果たすだけでなく、対外的にも評価されていると自負している。特に腎移植についてはわが国で初めて腎移植を行った歴史があり、現在も積極的に移植再生医療を進めており、その症例数も飛躍的に増加している。 腫瘍学の分野では、特に腎癌においては世界的な開発治験に参加するなど、本領域における先進的医療の牽引役を担っている。 内視鏡外科学においては、腹腔鏡下副腎摘除術を世界で初めて行ってきた以来、低侵襲の治療として腹腔鏡手術を積極的に行っている。また、平成26年2月より、ロボット（da Vinci）支援下での前立腺癌全摘除手術を開始し、28年11月にはロボット支援下での腎部分切除術を開始した。	当科では、4～5人の医師で構成される主治医グループの一員となり研修を行う。担当患者は偏りがないように受け持たされ、泌尿器科で扱う主要疾患の診療が理解できるように主治医グループから指導を受ける。これにより腎移植、泌尿器科腫瘍疾患、小児泌尿器疾患等の診療の一般的な流れについて把握することとなる。研修期間によっては、様々な腹腔鏡手術を見学する。献腎移植等の緊急手術に立ち会うなどの当科研修ならではの経験ができることもある。週2日（火・木）は外来での研修が主となり、泌尿器科外来で一般的に行われる処置・検査を研修する。月・水・金曜日の週3日が当科の手術日であり、症例にもよるが、原則として担当医の一人として手術に立ち会い、泌尿器外科医としての基本研修を積む。術前・術後の症例検討会が毎週木曜の夕方に行われる。各症例の治療方針について主治医グループの分け隔てなく検討・討論され、研修医も参加することになる。

眼科

診療科目 ：眼科	
診療科担当研修責任者名 ：福地 健郎（眼科診療科長） 診療科連絡先担当者名 ：赤木 忠道（眼科エデュケーションマネージャー）	
受入期間 ：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数 ：5人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
17人（大学に在籍する専門医の数）	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本眼科学会指導医3人（大学に在籍する指導医の数）	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
新潟大学眼科は明治43年新潟医学専門学校の創設とともに開講された。100年以上の歴史を有する日本でも数少ない眼科学講座の一つである。教室の主たる特色たるテーマは緑内障であり、基礎研究実績をこれまでに多数積み上げ、緑内障研究の第一線を歩んできた。臨床的にも県内外から多くの患者が来院し、非常に高度な緑内障診療が日常的に行われている。また、その手術実績は国内1、2を争い、その存在は際立っている。また緑内障だけでなく網膜・硝子体、角膜・感染症、斜視・弱視、神経眼科、腫瘍・形成、ロービジョンなど多数の分野それぞれに秀でた専門医を揃えており、そのいずれもが優れた臨床成績を誇っている。関連病院は新潟県内全域に及んでおり、一流の眼科医を目指すに足る充実した後期研修を受けることが可能である。	当科では疾患別に診療チームが構成されており、緑内障班、網膜・硝子体班、角膜・感染症班、斜視・弱視班、白内障班、神経眼科班、腫瘍・形成班がある。研修中は1グループを1か月交代で担当するが、研修期間により診療班の重複や交代時期をflexibleに対応することも可能である。当科手術日は月・水・金曜日であり、各グループで手術日が異なるが、他のグループの手術見学も可能である。術前・術後・難症例に対する診療科長を含めた回診が毎週水曜日に行われる。症例検討会も同日に行われ、研修期間中、担当患者の症例発表も行う。その他の曜日は、外来と病棟研修になる。外来も多くの専門外来があるため、見学だけでなく処置の助手等も担当することになる。どのグループに属しても細隙灯顕微鏡や倒像鏡など最も基本的な眼科診療手技を身につけるとともに、視野検査や眼底造影検査などの所見を判読するトレーニングも行う。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科

診 療 科 目：耳鼻咽喉科・頭頸部外科	
診療科担当研修責任者名：堀井 新（耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療科長） 診療科連絡先担当者名：泉 修司（耳鼻咽喉科・頭頸部外科エデュケーショナルマネージャー）	
受入期間：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数：４人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
日本耳鼻咽喉科学会専門医14人、日本頭頸部外科学会頭頸部がん専門医４人、日本癌治療学認定医４人、内分泌外科専門医１人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本耳鼻咽喉科学会専門研修指導医10人、日本頭頸部外科学会頭頸部がん専門指導医２人、日本耳科学会耳科手術暫定指導医１人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
耳鼻咽喉科・頭頸部外科は、鎖骨より上の、脳と眼球を除いた広い領域を担当しています。聴覚、平衡覚、嗅覚、味覚という感覚器や、嚥下、発声、睡眠、呼吸といったヒトにとって重要な機能の障害や、腫瘍性疾患などに対して、診断から治療までを一貫して行います。対象患者は小児から高齢者まで幅広く、診断のための検査、薬物治療などの内科的側面から、機能改善、がんの根治を目指す多くの外科的手術も行っている。感覚器・機能の専門診療科です。 耳領域では、重度難聴の患者が聞こえを取り戻すことができる人工内耳手術や、聴力改善、耳漏停止などを目指す鼓室形成術などを数多く行っています。めまいに対しては急性めまいだけでなく、慢性めまいに対してリハビリテーション、認知行動療法などを組み合わせた多角的な対応をしています。鼻領域ではアレルギー疾患に対する新しい薬物治療や、ナビゲーションなどの最新機器を用いた内視鏡下手術を多く行っています。咽頭喉頭領域は、扁桃炎などの急性炎症疾患の対応から、嚥下、音声機能などの機能改善を目指した手術を行っています。入院患者のうち多くを占めるのは頭頸部腫瘍患者です。頭頸部腫瘍の治療では病変の根治を目指すとともに、嚥下、発声機能などを考慮し、手術、放射線治療、化学療法を組み合わせ、患者に最適な治療法を選択しています。また当科は大学病院でありながら、耳鼻咽喉科救急医療をはじめとした一次、二次医療に対するニーズにも応えており、扱う症例は非常に多岐に渡っています。	病棟で主治医とともに患者を担当し、病棟業務、手術に携わります。入院から治療、退院にいたる一連の流れの中で、耳鼻咽喉科、頭頸部外科領域の診察法、検査、処置、手術手技の基本を習得することができます。また全身麻酔手術の周術期管理や、頭頸部腫瘍患者では放射線治療、化学療法に伴う全身管理を学ぶことができます。外来では耳鼻咽喉科専門的検査や、治療の適応判断、治療後の経過観察を学ぶことができます。担当する患者については、将来の希望を考慮しつつ、耳鼻咽喉科・頭頸部外来疾患を偏りなく経験できるよう配慮しています。 病棟、外来、手術室には最新の内視鏡、顕微鏡、モニターシステムがあり、指導医と画像を共有しながら研修をすることができます。医局、検討会室には多くの書籍も完備されており、知識、技術の予習、復習がいつでもできる環境が整っています。毎週の症例検討会では、全入院症例の検討を行っており、最新の知識を偏りなく習得できるとともに、プレゼンテーションの技術を身につけることができます。 当科では診療と同様に、学生、研修医教育に力を入れており、指導医全員が丁寧な指導を行っています。学会認定資格を持った指導医も多く、知識、技術も豊富です。 小児科から高齢者まで、内科から外科まで、専門性高いものから全身管理まで。広い範囲の多くの疾患を学ぶことができる耳鼻咽喉科・頭頸部外科での研修は、今後の医師として基盤形成に役立てると思います。

産科婦人科

診 療 科 目：産科婦人科	
診療科担当研修責任者名：古原 弘祐（産科婦人科学教室教授） 診療科連絡先担当者名：工藤 梨沙（産科婦人科エデュケーショナルマネージャー）	
受入期間：４週間以上	同時受け入れ可能数：５人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
日本産科婦人科学会専門医26人、日本臨床細胞学会細胞診専門医４人、日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医５人、日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医５人、日本生殖医学会生殖医療専門医２人、日本内視鏡外科学会技術認定医４人、日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医６人、日本周産期・新生児医学会専門医（母体・胎児）４人、日本女性医学学会専門医１人、がん治療認定医８人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本産科婦人科学会指導医９人、日本周産期新生児医学会指導医２人、婦人科腫瘍指導医２人、超音波指導医１人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
新潟医科大学創設からの伝統のもと、婦人科良性・悪性腫瘍の治療、北陸有数の規模を誇る総合周産期母子医療センターにおけるハイリスク妊婦における妊娠・分娩管理および新生児管理、加えて不妊症、不育症、更年期などの専門領域を含んだ広い分野における研修が可能である。近年は、婦人科悪性腫瘍・良性腫瘍に対する腹腔鏡下手術、母体血による胎児染色体検査（NIPT）など多岐にわたる先進的な診療を施行している。	主治医グループの一員として、積極的に診療に参加することを理念とする。 ２週間ずつ産科と婦人科を研修し、以下の内容を到達目標としている。 ・産科：経腔分娩の立ち会いを４例、帝王切開術の助手を２例行う。 産科外来で胎児超音波を行う。 妊娠高血圧症症例、切迫早産症例、多胎妊娠症例などを受け持つ。 ・婦人科：婦人科手術の助手を３例行う。 婦人科外来で内診、経腔超音波を行う。 子宮頸癌・子宮体癌・卵巣癌などの悪性疾患症例、および子宮筋腫・卵巣腫瘍などの良性疾患症例を受け持つ。 ・不妊症：不妊内分泌外来で不妊症検査を学ぶ。 また、火曜朝の術前検討会に参加する。

放射線科

診 療 科 目：放射線診断、IVR（Interventional Radiology）、核医学、放射線治療	
診療科担当研修責任者名：石川 浩志（放射線科診療科長） 診療科連絡先担当者名：海津 元樹（放射線科エデュケーション・マネージャー）	
受入期間：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数：３人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
日本医学放射線学会診断専門医17人、日本医学放射線学会治療専門医４人、日本核医学学会専門医５人、日本核医学学会PET核医学認定医５人、マンモグラフィ読影認定医９人、日本IVR学会専門医３人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本医学放射線学会認定研修指導者14人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
県下全域の基幹病院の放射線部門を関連病院とし、新潟県の放射線医療を担う人材を養成している。放射線科は全国的に人手不足に悩まされているが、当科では指導教育を担当するスタッフは、診断、IVR、治療各部門とも充実している。看護師、放射線技師などのco-medical staffも充実し、研修に最適な環境を可能にしている。設備面でも、3 T MRI、dual energy CT、PET/CT、高精度放射線照射装置、組織内照射装置など最新の機器をそろえ、放射線診療の基礎から高度先端的な分野まで、研修できる施設となっている。	研修プログラムA（放射線診断）：最低１ヶ月を研修期間として受け入れている。1対1の指導によって、頭頸部から胸腹部骨盤四肢まで、全身の三次元的解剖学的知識の形成と病態生理に基づく画像診断（IVRを含む）の基礎の習得を目指す。 研修プログラムB（放射線治療）：最低１ヶ月を研修期間として受け入れている。外来病棟管理、放射線治療計画、放射線治療中の患者診療といった放射線腫瘍学に基づく放射線治療医療の基礎の習得を目指す。 研修プログラムはA、Bいずれかのみもしくは両者の選択を可能とする。よって研修期間は、A、Bいずれかの場合は１ヶ月、両者の選択の場合は２ヶ月となる。 研修プログラム C：最初の３ヶ月と最後の３ヶ月、当科で研修する、放射線科専門医を希望する人のためのコース。上記A、Bの内容をさらに徹底させるとともに、希望によりCT、エコー、MRI、IVR、神経放射線診断、放射線治療などを個別に深く研修することもできる。

麻酔科

診 療 科 目：麻酔科	
診療科担当研修責任者名：馬場 洋（麻酔科診療科長） 診療科連絡先担当者名：古谷 健太（麻酔科エデュケーション・マネージャー） 倉部 美起（麻酔科総括医長）	
受入期間：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数：５人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
麻酔科専門医21人(機構専門医含む)、心臓血管麻酔専門医５人、ペインクリニック専門医４人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
麻酔科指導医９人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
麻酔科は1963年に開設された比較的新しい診療科である。手術数の増加およびハイリスク症例の増加と共に、その必要性も増している。新潟大学医歯学総合病院には15の手術室があるが、麻酔科が管理する年間症例数は5,000件以上に達し、年々増加傾向にある。麻酔科管理症例の幅は広く、新生児から超高齢者まで、リスクの低い症例から生命の危機が迫る症例まで、予定手術から超緊急手術まで、様々な症例に対する手術の麻酔・疼痛管理を行っている。その中には臓器移植の麻酔、心臓大血管手術の麻酔、小児麻酔、産科麻酔、脳神経外科麻酔などの高度な専門性を要する麻酔管理も含まれる。また、患者の術前状態を把握するため、麻酔科術前外来で麻酔科管理全症例の診察を行っている。さらに、ペインクリニック外来では帯状疱疹後神経痛、複合性局所疼痛症候群などの難治性疼痛患者の診察・治療を行っているほか、手掌多汗症に対する胸部交感神経管切除術、脊髄刺激電極植え込み術などの手術治療も行っている。	麻酔科は、特定の治療臓器を持たない点が特色である。言い換えれば、全身管理が仕事の一つである。当科研修では、術前評価、麻酔計画、術中術後管理を通して、周術期管理に触れてもらう。術前診察を通して、術前検査とその意義、術前合併症の評価法、術前中止薬などについて学ぶ。次に術前評価に基づき、適切な麻酔法・麻酔薬を選択するとともに、各種麻酔薬や筋弛緩薬、循環作動薬の知識を身につける。術中管理では、気道確保法（マスク換気、気管挿管、声門上器具など）や血管確保など、初療や急変対応に必須の手技や知識を身につける。術中の呼吸循環管理を通して、呼吸・循環生理、薬物動態、輸液管理法や、各バイタルサインとそこから得られる情報の意義についても学ぶ。これに加え、個々の進捗に応じて、中心静脈カテーテル挿入、脊髄くも膜下麻酔などの手技をはじめとして、特殊症例の麻酔も経験することが可能である。術後診察を介して痛みの評価法や術後痛管理について研修する。以上のことを個々の指導医たちとマンツーマンで行い、全身管理に必要な基本的手技や考え方を身につけることを目標とする。

高次救命災害治療センター

診療科目：救急医学、集中治療医学	
診療科担当研修責任者名：西山 慶（救急科診療科長） 診療科連絡先担当者名：本多 忠幸（救急科エデュケーションマネージャー）	
受入期間：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数：６人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
救急科専門医 9 人、集中治療専門医 8 人、麻酔科専門医 5 人、総合内科専門医 1 人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
救急医学会指導医 2 人、麻酔科指導医 1 人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
当部門は高次救命災害医療センターとして日本海側初めての高度救命救急センターである。救命救急センター20床と集中治療部12床の計32床で運営され、院内の重症患者対応と救急外来での救急車搬送患者（第3次救急患者）を対象に診療を行っている。診療実績として、救急車搬送台数は年間約3,300台以上、救急外来受診患者数は5,500人以上で、増加傾向にある。2012年10月よりドクターヘリ事業を開始し、現在年間1,200件以上のフライトを行っており、日本有数のドクターヘリ基地として新潟県全域を視野に入れた救急医療体制を行っている。当センターは、救急科専門医指定施設・指導医指定施設（日本救急医学会）、専門医研修施設（日本集中治療医学会）、認定施設（日本航空医療学会）、専門医認定研修施設（日本熱傷学会）である。	救急部研修では、ドクターヘリ及び救急車で救急外来に搬送される患者の初期対応を行い、チーム医療の一員として研修を行う。対象となる疾患は、心肺機能停止、多発外傷、急性心筋梗塞、急性呼吸不全、敗血症等の重症疾患から環境障害や急性薬物中毒、熱傷と多種に及ぶ。救急科入院となった患者は救命救急センターに入院となり、研修医は、指導医とともに患者を受け持つ。予定入院とは異なり、リアルタイムでトリアージ、診察、診断、治療を行うことで、救急患者に対する対応を学ぶことが出来る。さらに超音波検査、中心静脈穿刺、気管挿管等の手技も上級医・指導医のもとで学べる。また、救急科では2交代制（日勤・夜勤）をとっており、研修医にも夜勤を行ってもらう。救命救急センターには24時間体制で専任医師が待機しており、夜勤帯においても3名の上級医・指導医が当直している。従って、常に上級医・指導医のもとで研修が行え、的確な指導・アドバイスを受けることができる。午前8時30分に症例検討・回診を行い、問題点を積極的にディスカッションしている。毎週、テーマを決めて抄読会を行っている。希望者はオンサイトでのドクターヘリ実習を行うことも可能である。

リハビリテーション科

診療科目：リハビリテーション	
診療科担当研修責任者名：川島 寛之（リハビリテーション科診療科長） 診療科連絡先担当者名：木村 慎二（リハビリテーション科病院教授）	
受入期間：１ヶ月以上	同時受け入れ可能数：１人
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
日本リハビリテーション医学会専門医 2 人、日本整形外科学会専門医 2 人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本リハビリテーション医学会指導医 1 人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
当リハビリテーション（以下、リハ）科は平成28年4月に開設し、実際の外来およびリハ診療は総合リハセンターで行われている。当センターは平成18年1月に、新病棟東館2階に移転し、施設面積は704㎡と広く、PT室、OT室がそれぞれ大きな1室になり、ST室は個室3室を備えている。リハスタッフは理学療法士（PT）13名、作業療法士（OT）5名、言語聴覚士（ST）5名、看護師4名、リハ医は5名（専従4名、兼任1名）である。その他にセンター内には摂食嚥下リハ部門（兼任歯科医5名）と呼吸リハ部門（兼任呼吸リハ担当内科医2名）があり、リハ医療の全般を行っている点が特徴である。年間の当センターでのリハ施行延べ人数は約5万3千名であり、その疾患は多岐にわたる。平成18年1月に日本リハ医学会研修施設に認定され、さらに平成26年4月からは、がんリハと心大血管リハも新たに開始している。	初期研修によって、各種疾患のリハ医療に対応可能で、かつ専門性の高いリハビリテーション診療を習得する目的に本コースでの研修を行う。これらの研修を通して、臨床の場での情報交換と生涯学習ができる体制を構築する。 リハビリテーション医学はQuality of life（QOL）の向上を目指すことが本質である。対象疾患は全ての診療科の疾患であるため、あらゆる疾患の概念、治療法を熟知することはもとより、リハ医学に特異的な診察、処方を知ることが必要である。他院では経験することが難しい摂食嚥下リハ、呼吸リハについてもそれぞれの専門医の指導の下、研修することが可能である。さらには介護保険を含めた社会保障制度、家屋構造・社会福祉制度に関する情報の習得、ハンデキャップをお持ちの患者様への心理的アプローチなどの研修にも適している。

病理部

診 療 科 目：病理組織診断、細胞診断	
診療科担当研修責任者名：大橋 瑠子（病理部長）（予定） 診療科連絡先担当者名：谷 優佑（病理部エデュケーショナルマネージャー）	
受入期間：2ヶ月以上	同時受け入れ可能数：2人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
病理専門医6人、細胞診専門医5人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
病理学会指導医4人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
病理部は中央診療部門の1つとして、各診療科の組織診断、細胞診断、術中迅速診断をおこなっています。診断業務においては病理部のみならず、医学部病理学関係講座、脳研究所、歯学部口腔病理学講座と連携し、対応しております。 また、解剖例も年間50例程行われ、十分な研修が積める体制です。	当科研修では、病理組織診断、細胞診断、術中迅速診断を主体に予定しています。また、各科との検討会、解剖例のC P Cにも参加します。 さらに病理標本の作製法や染色法なども研修できます。幅広い臓器、疾患の研修に、病理部は適したものと思います。

血液浄化療法部

診 療 科 目：腎臓内科、膠原病内科	
診療科担当研修責任者名：成田 一衛（血液浄化療法部長） 診療科連絡先担当者名：山本 卓（血液浄化療法部副部長）	
受入期間：1ヶ月以上	同時受け入れ可能数：2人
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
内科学会専門医11人、腎臓専門医11人、透析専門医8人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
内科学会専門医5人、腎臓専門医4人、透析専門医4人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
独立した中央診療部の一部門として、院内における全ての血液浄化療法を担当しています。 ベッドは14床で、年間4,000－5,000例の血液浄化療法に使用されます。①維持血液浄化療法としては血液透析と血液濾過透析、②急性血液浄化として血液透析、持続血液透析濾過透析、血漿交換、ポリミキシンB 固定化カラムを用いた血液吸着など、③特殊血液浄化として二重濾過血漿交換、リンパ球除去、顆粒球除去、抗アセチルコリン受容体抗体除去などをそれぞれ施行しています。対象患者は新生児から成人までであり、要請があればICU やNICU にスタッフが出張して治療を行います。腹膜透析は年間10－20例導入され、約30例が維持腹膜透析患者として通院しています。	研修内容は、1）透析患者の全身管理、2）各種血液浄化機器の設定、操作、3）血液浄化に必要なアクセス手術、4）血液透析・腹膜透析の導入と管理、5）腎移植の術前・周術期・術後管理、6）急性血液浄化療法の導入と管理などです。 腎臓病患者、とくに透析患者は心血管病、感染症、悪性腫瘍など種々の全身疾患のリスクが高く全身管理が必要となります。その中でも体液、電解質、貧血、骨ミネラル代謝異常など一般的診療から腎臓病患者に特化した管理が重要です。 腎・膠原病内科に入院中の腎臓病患者だけでなく他科入院中の透析患者の透析管理を行うことで、総合診療的な全身管理を習得できます。また腎不全患者のバスキュラーアクセスの手術、中心静脈カテーテル留置、カテーテルインターベンションなど専門的な技術を習得することができます。 透析療法、腎臓内科はもちろん、総合診療に興味のある研修医の参加を歓迎します。

医科総合診療科

診療科目：総合診療、内科、地域医療	
診療科担当研修責任者名：上村 顕也（新潟大学医学部医学科総合診療学講座 教授） 診療科連絡先担当者名：馬場 晃弘（新潟大学医学部医学科総合診療学講座 総括医長）	
受入期間：1ヶ月以上	同時受け入れ可能数：1人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
内科学会専門医3人、消化器病学会専門医1人、肝臓学会専門医1人、呼吸器学会専門医2人、アレルギー学会専門医2人、感染症学会専門医1人、腎臓専門医1人、透析専門医1人、糖尿病学会医専門医1人、家庭医療専門医1人、全日本病院協会認定総合医1人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
消化器病学会・肝臓学会指導医1人、呼吸器学会指導医1人、アレルギー学会指導医1人、日本プライマリ・ケア連合学会認定指導医2人、日本専門医機構総合診療専門研修特任指導医4人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
近年、高度専門医療が求められる一方で、患者中心全人的医療を提供することが強く期待され、平成13年度に院内措置として総合診療部は開設された。平成14年度に文部科学省に新設が認可され、現在に至っている。医学部の地域医療学講座および総合診療学講座のスタッフも加わり、地域医療などにも対応できる広範囲の総合診療のトレーニングが可能となっている。	当科研修は選択科目であり、研修時期としては研修の2年目に行うこととなる。最大の特徴は、外来をファーストタッチから行うことである。医科総合診療部を訪れる多岐な訴えを主訴とする患者さんを初診の医療面接からはじまり、身体診察、各種検査のオーダー、投薬治療など全て行う。また、これらの患者さんの再来時の対応、検査結果の説明も行うこととなる。外来診療時は、常に指導医が常駐し、その場で適切な指導をマンツーマンで行う。外来の新患症例全てを検討する外来検討会を週一回設けており、自分の行った診療行為に対する指導、アドバイスとともに、上級医の外来診療行為の解説を受けることが可能であり、幅広い能力を身に着けることができる。

臨床研究推進センター

診療科目：臨床研究推進センター	
診療科担当研修責任者名：田中 基嗣（副部長） 診療科連絡先担当者名：同上	
受入期間：1ヶ月以上	同時受け入れ可能数：4人以内
◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆	
日本内科学会認定内科医・総合内科専門医1人、日本腎臓学会腎臓専門医1人、日本透析医学会透析専門医1人、日本腹膜透析医学会認定医1人、日本歯周病学会認定医1人、日本歯科保存学会歯科保存治療認定医1人	
◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆	
日本内科学会内科指導医1人、日本腎臓学会指導医1人、日本透析医学会指導医1人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴
大学病院の役割は、「臨床」、「研究（基礎研究・臨床研究）」及び「教育」に大別される。臨床研究推進センターは、大学病院における「研究（臨床研究）」において中心的役割を担う組織として、治験・臨床研究が、倫理性と科学的妥当性を確保して実施されるように、「医薬品医療機器等法」、「臨床研究法」、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」等に則って支援している。臨床研究は、研究者主導の小規模の観察研究から企業主導の大規模国際共同試験まで様々であり、それぞれの研究の規模や性質によって、我々の果たすべき役割は異なるが、臨床研究推進センターのミッションは、①新潟大学医歯学総合病院における企業治験の遂行、②研究者主導臨床研究（医師主導治験、特定臨床研究、その他の臨床研究）の推進、③治験・臨床研究に関する教育に要約できる。さらに、④臨床研究を通じて新しい医療技術を創出することによって社会に貢献することも重要な目標である。 現在、当センターは約45名のスタッフがおり、医師、歯科医師、薬剤師、看護師、臨床検査技師等に加え、治験及び臨床研究に必要なプロジェクトマネージャー、生物統計家、モニター、データマネージャー、治験関連の事務職員等が所属している。医薬品医療機器総合機構（PMDA）や日本医療研究開発機構（AMED）の勤務経験者も配置されており、専門のスタッフが治験・臨床研究の計画、実施、評価及び報告までのプロセスを適切に支援している。また、臨床研究推進に必要な新規事業にも積極的に取り組んでいる（臨床研究支援パッケージコンテスト）。	医薬品医療機器等の開発にかかる国際競争が激しくなるにつれて、臨床研究に関する法規制も変化し、求められる倫理性や信頼性の水準も高まっている。このような時代の変化に対応して、本邦の臨床研究をリードできる若手人材を育成するため、令和4年度から初期研修医の受入れを開始した。 臨床研究推進センターは、企業治験の実施支援のほか、Academic Research Organization（ARO）として、様々な職種の専門家が協働して研究者主導臨床研究の計画から実施・総括を支援している。本研修では、以下の5つを習得目標に設定している。 A）臨床研究デザイン力を養う B）臨床研究の規制や倫理の基本を理解する C）治験及び臨床研究の実際の流れと役割分担を理解する D）レギュラトリーサイエンスについて学ぶ E）臨床研究論文の批判的吟味について学ぶ この方略として、治験・臨床研究に関する基本的知識を補完するための講義、業務見学を通じた実務指導のほか、抄読会、研究デザイン発表による演習を行い、体得したスキルの実践能力を評価できるプログラムを用意している。 本研修では、臨床研究の楽しさと臨床研究を学ぶことが臨床のスキルアップに繋がることを体感することができる。また、AROの業務や役割について理解することが、将来の医師像形成に役立つことが期待できる。